



「紫舟」作品展

期間 | 2017年9月9日(土) - 11月6日(月)

休館日 9/11, 19, 25, 10/10, 16, 23, 30

会場 | 愛媛県美術館 新館 常設展示室 2

〒790-0007 愛媛県松山市福之内 089-932-0010

時間 | 9:40 - 18:00 入室は17:30まで

入場 | 無料

「喰うカラス、喰われるカラス」

アクリル・ガッシュ、鉄、墨画 H174cm×W177cm

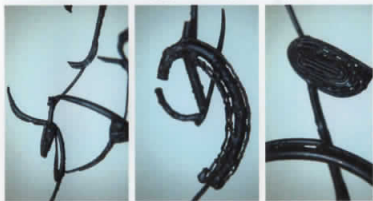
古くより、雑食で河原の死体をも食むことから、忌み嫌われたカラス。全てを喰らうカラスも、また捕食される側となるのは、自然の摂理。くちばしの折れたカラス、それは生の象徴(喰くこと喰うこと)を失うこと。生き残り死の淵に立ち叫喚したその鳴き声は、再びの甦り。

展示実績

フランス ルール美術館地下 (2015) イタリア トリエナーレ美術館 (2017)



「書のキュビズム」 「静めと不屈」(左) 「森羅万象の一」(中) 「終初天地の環」(右)



「書の彫刻」 「おはようありがとうごめんさい」

【展示作品】

◎書

漢字には意思があり、文字は意味を宿す。書かれた書からはその言葉の恩恵が溢れ出るように、節度をもった食事や暮らしから生まれた高い集中力を筆先に宿し書かれた新作を発表。

◎書画

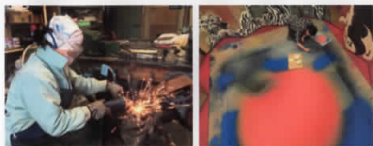
美術と文学が密接な東アジアの伝統表現、絵の中に書を描く。その書は意味を越え造形としての役割を果たし、書と絵が互いを支え影響し合う。日本語が絵の中で心地よい調和を生み出す作品。

◎屏風＋彫刻

紙と糊だけで表にも裏にも折り曲げることができる日本の匠の技、屏風。屏風の前に吊るされた書の彫刻、そして彫刻が落とす影を融合させた、美術史に類のない新しい概念を生み出した絵画。

◎書の彫刻

文字は本来立体であった。当時、文字は骨に強く深く彫り刻まれていた。その誕生の歴史を遡り、平面から3次元に解放させた書の新たなカタチ。立体の書の影は再び平面に戻る。



◎書のキュビズム

360度鑑賞できる書。筆が紙に触れる「深さ」を可視化し、筆が紙にあたる面と動きを、彫刻墨蹟にねじれを生じさせることで再現した。文字の多面性・記号性を改めて問いたす作品。



紫舟 SISYU

書家／アーティスト

代表作、NHK大河ドラマ「龍馬伝」、美術番組「美の壺」、伊勢神宮「祝詞運宮」、内閣官房「APAN」、ディズニー・ビクター「喜悲怒懣怖」。

2014年にフランス・ルーブル美術館地下会場にて開催されたフランス国民美術協会展では、屏風書画と書の彫刻で、金賞と最高位金賞を日本人初のダブル受賞。「北斎は立体を平面に、紫舟は平面を立体にした」と評される。翌年同展にて世界で1名枠とされる「主催招待アーティスト」に選出。日本人では横山大観以来、現存日本人初。

2015年、イタリア・ミラノ国際万博ジャパンパビリオンにおいて「Scene 1」の空間の全アートワークを担当、国際万博初の金賞受賞。

日本の伝統文化である「書」を、書画・メディアアート・彫刻へと昇華させながら、文字に内包される感情や理を引き出し表現するその作品は唯一無二の現代アートとなり、世界に向けて日本の文化と思想を発信している。

SNS ID: sisyu8



www.e-sisyu.com